

2017 年 1 月 13 日

「博士学位請求論文」審査報告書

審査委員 (主査) 情報コミュニケーション学部 専任教授

氏名 根橋 玲子 (印)

(副査) 情報コミュニケーション学部 専任教授

氏名 施 利平 (印)

(副査) 明治学院大学社会学部 専任教授

氏名 野沢 慎司 (印)

1 論文提出者 叶 尤奇

2 論文題名 上海における日本人海外駐在員妻の異文化生活体験: アイデンティティ,
パーソナル・ネットワーク, 日本人下位文化(英文題) The Intercultural Experiences of Japanese Expatriate Wives Living
in Shanghai : Identity, Personal Network and Japanese Subculture

3 論文の構成

序章 本論文の目的と構成

第 1 章 研究背景

- 1.1 上海における外国人の現状
- 1.2 上海在住の日本人の現状
- 1.3 上海における外国人在住の歴史背景
- 1.4 小結

第 2 章 分析的枠組み

- 2.1 海外駐在員妻に関する研究
 - 2.1.1 米国人を中心とした海外駐在員妻の研究
 - 2.1.2 日本人海外駐在員妻の研究
- 2.2 アイデンティティに関する研究
- 2.3 パーソナル・ネットワークに関する研究
- 2.4 下位文化理論に関する研究
- 2.5 小結

第 3 章 調査概要

3.1 調査方法

3.2 調査協力者の概要

第 4 章 分析結果Ⅰ：アイデンティティのありよう

4.1 上海渡航以前

4.1.1 中国での生活に対するイメージ

4.1.2 家族帯同を選択する理由

4.1.3 上海に転居するための準備

4.2 上海渡航後の生活

4.2.1 住居環境の選択

4.2.2 食生活の営み

4.2.3 子どもの学校の選択

4.2.4 子どもの習い事を選択

4.2.5 言語の使用

4.2.6 家族生活

4.2.7 余暇の使い方

4.2.8 生活全般に対する評価

4.2.9 中国社会・中国人に対する考え

4.2.10 上海に対する考え

4.3 考察と小結

第 5 章 分析結果Ⅱ：パーソナル・ネットワークのあり方

5.1 タイプⅠ：近隣ネットワーク重視型＋協力的な夫婦関係

5.2 タイプⅡ：複合ネットワーク重視型（日本人のみ）＋協力的な夫婦関係

5.3 タイプⅢ：複合ネットワーク重視型（日本人のみ）＋非協力的な夫婦関係

5.4 タイプⅣ：複合ネットワーク重視型（中国人や他の外国人との関わり有） ＋協力的な夫婦関係

5.5 考察と小結

第 6 章 分析結果Ⅲ：上海の日本人下位文化の影響

6.1 タイプⅠ：SJ13 のケース

6.2 タイプⅡ：SJ53 のケース

6.3 タイプⅢ：SJ46 のケース

6.4 タイプⅣ：SJ30 のケース

6.5 考察と小結

終章 総合的考察とまとめ

引用文献

英語引用文献

日本語引用文献

中国語引用文献

4 論文の概要

グローバル化により、国境を越えて人々は外国に移住し、移住先の社会の経済や政治など様々な側面に多大な影響を与えている。上海を例として挙げると、1980年代の改革開放政策の推進により、数多くの外資企業が上海に進出してきたことに伴い、様々な外国人が上海で生活し、彼らに関する研究が徐々に増えている。これまでの研究は日本人男性の専門・管理職に着目したものが多く、また上海在住の日本人女性を対象とした先行研究は、中国人と結婚して上海で生活する日本人女性を対象としたものや上海で働く日本人女性の仕事と生活の経験を考察するもののみで、上海在住の日本人駐在員妻について言及する研究はない。

本論文は、上海在住日本人海外駐在員妻の異文化生活の体験を説明可能な理論的モデルにすることを目的とする。このモデルを構築するために、本論文では次のような分析を行っている。日本人海外駐在員妻が、上海で生活するなかで、(1) 彼女たちのアイデンティティのありようはどのようなになっているのか、(2) 彼女たちは、どのようなパーソナル・ネットワークを有しており、このネットワークはアイデンティティのありようとどのように関連しているのか、(3) 彼女たちは、上海の日本人下位文化とどのように関わっているのか、上海の日本人下位文化が彼女たちのアイデンティティのありよう並びにパーソナル・ネットワークにどのような影響を及ぼしているのか。本論文では、上海在住の日本人駐在員妻を対象とし、彼女たちが上海でどのような日常生活を送っており、そのような経験は彼女たちにとってどのような意味を持つのかに着目し、駐在員妻の主観的な経験を重視し、彼女たち自身が自身の体験にどのような意味を付与しているのかを質的アプローチを通して分析している。

上海在住の日本人海外駐在員妻の異文化生活の経験を理解するために、有用な分析的枠組みとして、アイデンティティ、パーソナル・ネットワーク、下位文化に着目することになったのは、先行研究に限界を感じたためである。これまでの米国人を中心とした海外駐在員妻の研究では、Black とその共同研究者による、適応の概念に基づくモデルの構築に関する研究が支配的な影響を及ぼしてきた。これらの適応研究では、海外駐在員妻は、滞在国の人々と積極的に関わっており、滞在国の社会・文化に適応することが共通の前提となっている。しかし、これまでの日本人駐在員妻の研究では、異文化生活における他の側面、伝統的なジェンダー役割（母親・妻の役割）の意識・実践、日本の文化アイデンティティの保持、海外経験と個人の自己実現やキャリア形成との関連、そしてパーソナル・ネットワークの構築に関する研究が行われてきた。そのほか、日本人海外駐在員妻とその家族を直接の研究対象としてはいないが、彼女たちを取り巻く日本人コミュニティの形成・変容に注目する研究も進められてきた。これらの研究では、米国人の研究とは異なった知見が示唆されている。具体的には、日本人海外駐在員妻は、滞在国の社会・文化への適応より、自身の母親役割と妻役割の遂行と日本の文化アイデンティティの保持を優先していることが指摘されている。また、日本人海外駐在員妻は、滞在国で生活するなかで、滞在国の人々との関わり合いよりは、滞在国の日本人同士の関係維持を重視していることも報告されている。さらに、滞在国における日本人コミュニティは、日本人海外駐在員妻とその家族の日本の生活様式の維持や、彼女たちの日本の文化アイデンティティを保持することに重要な役割を果たしていることが明らかになっている。つまり、米国人を中心とした海外駐在員妻の研究から導き出された、適応の概念に基づくモデルを用いたとしても、日本人海外駐在員妻の異文化生活を説明しきれないと推察できる。その一方で、従来の日本人海外駐在員妻研究は、米国人を中心

とした海外駐在員妻の研究と比較して、多様なアプローチを用いているが、異文化生活の一部に焦点を当てて研究が行われてきた。これらの研究は、日本人海外駐在員妻の生活全般を反映し、彼女たちが自身の異文化生活の体験をどのようにとらえているのかについて、十分な説明をもたらしてくれるものではなかった。このような先行研究の限界を加味すれば、上海在住の日本人海外駐在員妻の異文化生活の体験を説明するために、新たな分析的枠組みが必要になると考えられる。そこで、本論文では、従来の日本人海外駐在員妻の研究において重要な概念であるアイデンティティ、パーソナル・ネットワーク、日本人コミュニティ（本論文では日本人下位文化と呼んでいる）に関する研究を整理したうえで、それらの研究から得られた知見に基づき、上海における日本人海外駐在員妻の異文化生活の体験を理解するために用いられる分析的枠組みの構築を試みた。

第 1 章では、本論文の研究対象の日本人海外駐在員妻を取り巻く社会的環境である 21 世紀初頭の上海の現状について説明を行い、上海における外国人の現状、とりわけ上海在住の日本人の現状およびそこに至る歴史的背景について整理している。

第 2 章では、米国人を中心とする海外駐在員妻を対象とした先行研究を概観したうえで、これまでの異文化適応のモデルとその限界について説明している。その上で、新たな分析的枠組みの必要性を論じ、先行研究から導き出されたアイデンティティ、パーソナル・ネットワーク、下位文化という三つの概念に関する研究を取り上げ、これらの研究から本論文に示唆する知見を論じている。

第 3 章では、本論文で用いる現地調査の方法および調査協力者の基本情報を詳述している。上述の分析的枠組みに基づき、第 4 章、第 5 章および第 6 章では、インタビュー調査の分析結果を論じている。

第 4 章では、調査協力者が、上海でどのような生活を送っているのかを明らかにしたうえで、彼女たちのアイデンティティのありようがどのようにになっているのかに焦点をあてて考察を行っている。多くの協力者が妻・母親としてのジェンダー役割を実践し、ジェンダー・アイデンティティを強く自覚しながら生活しているものの、これらの役割を遂行するだけに留まらない者もいることが判明した。

第 5 章では、調査協力者が、どのようなパーソナル・ネットワークを有しているのかを説明している。また、このネットワークの構成員や得られる援助から調査対象者を 4 つのグループに分類して論じている。また第 6 章では、調査協力者が、上海における日本人下位文化とどのように関わっているのかを明らかにしたうえで、上海の日本人下位文化が、調査協力者のアイデンティティのありよう並びにパーソナル・ネットワークの形成に与える影響について考察を行っている。具体的には、①近隣に緊密なネットワークを持つ者（タイプⅠ）は、居住マンションを活動の場とし、妻・母親としてのアイデンティティの実践を優先している。②居住マンション外の日本人下位文化施設を利用する者（タイプⅡ）は、分散したネットワークを形成し、自身の趣味やキャリアを発展させる可能性を探索している。③同じく居住マンション外の日本人下位文化施設を利用し、分散したネットワークを持つものの、夫からの援助のない者（タイプⅢ）は、滞在初期はネットワークに依存しているものの次第に独立する。④日本人下位文化の施設のみならず、語学学校など他の施設を媒介としてネットワークを外部へ拡張している者（タイプⅣ）もいる。

最後に、終章では分析結果を通して、上海在住日本人海外駐在員妻の異文化生活を説明するために下位文化、パーソナル・ネットワーク、個人の3つのレベルから理論的モデルを提示している。さらに、既存の適応の概念に基づいて作られたモデルと比較して、この新しい理論的モデルの有用性について議論を行っている。

5 論文の特質

「人々が新しい環境に移動し、適応していくこと」、特に人の国際移動に関する学問的問いは、特に戦後からグローバル化の進む現代では重要な課題であり、多くの研究者が取り組んできたものである。移民、難民、留学生、駐在員等に関して、社会学、文化人類学、心理学、教育学、経営学、法学等さまざまなディシプリンにおいて異なる人々を対象に知見が積み重ねられてはいるものの、依然明らかにすべきことの多いトピックである。

本論文の特質は、これらの中でも、上海における日本人駐在員妻というグループに焦点を当てたことである。従来の駐在員妻研究の多くは、欧米の駐在員妻を対象としたものおよび欧米諸国に在住する日本人駐在員妻に着目しているが、中国・上海に在住する日本人駐在員妻を直接の研究対象とした研究はない。また、既存の米国発の異文化適応モデルに依拠はするものの、既存モデルでは上海在住の日本人海外駐在員妻の異文化生活体験を説明しきれないことから、新しい枠組み・モデルを構築した点も本論文の特筆すべき点である。特に、アイデンティティ、パーソナル・ネットワーク、下位文化という三つの概念を用いて新たな分析の枠組みを構築している。

6 論文の評価

本論文は、上記でも述べたように、上海における日本人の駐在員妻の体験を理解する研究としては初めての試みであり、これまでの駐在員妻や女性の海外在住に関する関連研究に重要な貢献を行ったと評価できる。本論文の中核を形成する議論については、既に4篇の論文として学会誌をはじめとする学術誌に掲載されていることが傍証となっている。また、評価を損なうものではないが、審査の面接において、次のような指導的助言が行われた。すなわち、日本人駐在員妻が欧米では米国の研究と同様にホスト文化に適応することを試みるのに対し、本論文の調査協力者は多くが下位文化の中で閉じていることについて、本論文の調査協力者が置かれているコンテキストを言語と国のパワー格差の視点から言及すること、が求められた。

7 論文の判定

本学位請求論文は、情報コミュニケーション研究科において必要な研究指導を受けたうえ提出されたものであり、本学学位規程の手続きに従い、審査委員全員による所定の審査及び最終試験に合格したので、博士（情報コミュニケーション学）の学位を授与するに値するものと判定する。

以 上